

ものづくり産業を支える仲間たち②1

JAM—池袋珪瑯
(ほうろう)工業株式会社

今回は、池袋から西武池袋線の急行で25分くらいの所沢から二つ目の「新所沢」からタクシーで10分くらいのところにある池袋珪瑯工業株式会社を訪問した。

社名からして、池袋に関係がある予想されたが、同社の創業は、1923年12月に池袋に珪瑯(ほうろう)工場を創立したことに始まること。今から約85年前の創立当時は、池袋駅東口にある三越デパートのところに工場があったとのこと。今の池袋駅周辺の賑わいからは想像もつかない。東京オリンピックの3年前の1961年に今の所沢工場が建設された。今でも、池袋には営業所があるという。

製造する製品も時代によって大きく変遷している。最初は、ほうろうの鍋釜を作っていたが、戦後の団地建設ラッシュのときに、団地用のユニットバスを製造し、業績を伸ばした。しかし、オイルショック以降は、ユニットバスの製造も減少の一途をたどり撤退。業態を、ガラスライニング技術を使った医薬用機器の製造に転換していった、今日を迎えている。

同社が手がける「ほうろう」製品は異色である。塩酸や硫酸などの酸や各種薬品に強く、それらと化学反応を起こすことのない「ほうろう」は製薬会社や化学工業関係の大型反応機として活躍している。タンクの内部がいわゆる“ほうろうびき”となっているが、この特殊なタンク製造を池袋珪瑯工業が手がけている。家庭用品などの「ほうろう」とは異なる

フランスの凱旋門をイメージして建てられた本社ビル



最終の「組立工程」細心の注意と技術で付属品をタンクに組み付ける。



り、銅板用上ぐすりはガラスそのものにより近く、厚みもあり、特殊技術を要する。それ故、「ほうろう」とは言わず、「ガラスライニング」と言う。ライニングとは「線引き」つまりコーティングのことだ。

このように、ガラスと金属、双方の優れた特性の結合から誕生した夢の複合材料がガラスライニングである。同社は、このガラスライニング技術を用いて、わが国で最初に化学工業用大型ホロー機器(ガラスライニング機器)を開発して以来、長い歴史を刻んできた。1923年創業後、今日までガラスライニングに関する同社の特許取得は100件を超えている。ガラスライニング技術は、豊富な資料と実績を不可欠とする体験工学ともいわれ、わが国では唯一最高のパイオニアとして、化学工業発展の礎石を築き活躍してきた。

大きな化学工場では、このガラスライニングのタンクが最低でも百基はあるという。まさに、ガラスライニング技術は、化学工業の飛躍的発展の原動力の一翼を担うまでになっている。医薬会社の液体攪拌タンクの製造な

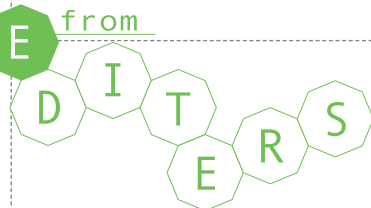
ども行っている。この他、ガラスライニング製品がメインで、反応缶、貯槽、熱交換機、濾過器、蒸留装置などのGL機器を製造している。タンクの大きさは小は50リットルから大は60m³までである。

製造工程は三つに大別される。まず銅板を切って、曲げて、溶接して、鉄のタンクをつくる「製缶工程」。現場は至るところ鉄板だらけで、半製品の大小のタンクが並んでいる。円柱の胴の部分にドーム型のヘッドの部分を取り付ける溶接作業をしていた。薬剤液の攪拌機などは高度な密閉性が求められるため、特殊な溶接技術が必要な工程である。2番目の工程は、タンクの内面にガラスを焼き付ける「焼成工程」である。鉄とガラスという異質のものを密着させて、強度な材質に進化させるこの工程こそ、ガラスライニングの特殊技術だ。吹きつけはすべて手作業で行われる。下ぐすり、上ぐすりを何度も吹きつけと焼き付けを繰り返す。この薬の調合や吹きつけは、ほうろう技能士という国家資格を持ったベテランが担う。そして、3番目の工程が、タンクにいろいろな付属品を組み付け、完成品とする「組立工程」である。

表紙のイラストは、最後の組立工程で付属品をタンクに組み付け作業している労働者を描いている。焼成工程で仕上がったタンクに付属品をボルトなどで据え付けるが、焼き付けられた内壁などを傷つけないよう組立工程は、2~3人でチームを組んで行われ、細心の注意と技術が必要とされる。ここで、タンクの内壁などを傷つけたりすると、1週間くらいではすまないことになるので、組立には熟練の技術と細心の注意が必要となる。

同社の誇りの一つは、製缶・焼成・組立のすべての工程で、全品検査を実施していることだ。客先が薬品・化学の大手有カメーカーであるだけに、技術と信用が絶対だからだ。同社の品質方針として、①品質第一、②限りなき改善、③全員参加の3点が掲げられているが、少数精鋭ながら、日本のものづくり産業を支える気概と誇りが、働く一人ひとりの顔にみまがっていた。(美)

SUMMER
issue
[夏号]



◆今号では、「変化するアジアのものづくり現場と労働運動の課題」と題して、去る6月にマレーシアの首都

クアラルンプールで開かれた第1回アジア金属労組連絡会議の討議内容を取り上げた。「不安定労働」すなわち派遣・請負・パートなど非正規労働者の問題は、今や特にアジア全体で深刻な問題となっており、各国金属労組とも法改正も含めて、一生懸命取り組んでいる。同じアジアの金属労組の仲間たちが、不安定労働の問題にもそれぞれ真剣に闘っている。相互理解こそが大事だと痛感した。◆アジアで3回目、この8月8日、北京オリンピックが開幕した。日本

が、44年前、1964年に東京オリンピックを開催したときを想起する。折しも高度成長時代に突入り、世界の先進国の仲間入りをすべく、みんな必死だった。公害問題も深刻だった。新幹線や首都高速道路など突貫工事でもよく間に合わせた。北京オリンピックを契機に中国がより民主的に大きくステップアップすることを期待したい。特に労働組合の面でも、民主的で、真に労働者のための組織に変化することを念願する。(美)